

## 河口龍夫(かわぐち・たつお)

1940年兵庫県神戸市に生まれる。1962年に多摩美術大学絵画科を卒業。1961年に京都アンデパンダン展に初出品し、1979年までほぼ毎年出品する。「関係」そのものを表現した作品を国内外で発表し、第一線で活躍する。主なグループ展に「東京ビエンナーレ1970 人間と物質」(1970年、東京都美術館 京都市美術館)、「大地の魔術師」ポンビドー・センター他(1989年、パリ)、主な個展は「特別展 河口龍夫—関係・京都」(1999年、京都市美術館)、「河口龍夫展 言葉・時間・生命」(2009年、東京国立近代美術館)など。筑波大学芸術学系名誉教授。京都造形芸術大学大学院客員教授。金沢美術工芸大学名誉客員教授。

### 自由な「京都アンデパンダン展」で最初の作品発表

多摩美術大学の在学中に京都アンデパンダン展<sup>1</sup>に参加してから、ほぼ毎年作品を出していました。大学では、絵画や彫刻について、その歴史を含めて勉強して、そこにとどまらず「芸術家」というものになりたいと思って試行し作品制作をしていたら、京都市美術館のアンデパンダン展があった。僕は団体展に興味は湧かなくて、発表場所がなかったんですが、京都アンデパンダン展は自分で作品を決めて、500円の出品料さえ払えば誰でも出せる。きちんと美術の勉強をした人も、日曜画家みたいな人も一緒に作品が並んでいて、自由度がすごい高いんです。

最初の作品は1961年(21歳)で、2点の平面作品《玉乗り》と《二人》。油絵の具象絵画ですけど、これは大学時代の自分みたいなもの。玉の上に乗っているように不安定で、大地に足を置いていない。いつ転がるかわからないという精神状態かな。1960年(20歳)に安保闘争があつて世の中にひとつの動きが起こった。僕は美術作品でプロパガンダをテーマにするタイプではないので、直接デモに参加したんです。ただ、デモも多いいろんな情報があつて、どれが正しいか見抜くのは困難だけど、それはちゃんと見ないとけない。そんな60年代にあつて、京都アンデパンダン展は自由が保証されていて、自主独立のものだった。

### グループ〈位〉の活動と、美術評論家・中原佑介氏との出会い

1965年(25歳)にグループ〈位〉を結成しました。芸術家と社会は1人対社会の関係だから、小さくても社会対社会の関係にしたくて、仲間とグループをつくったんです。この年に岐阜のアンデパンダン・アートフェスティバルに参加して、長良川の河畔に直径10メートル程の穴を9人で掘りました。ひたすら純粋に穴を掘って穴を実存させる。10日間かけて掘った穴は他の実用目的で使用されない純粋な穴として存在させたので、最後の日に埋めました。これまでの媒体には取まらない自由な表現形式に僕はうきうきしていた。そこには仲間の連帯感があつて、各々が込めた思いは違うけど、すべてを穴が飲み込んでいくんです。あらゆる拘束のない表現で、共感して見てくれる人もいて、その人たちの高い精神性も含めてアートの存在というものを感じました。



グループ〈位〉《穴 大地と行為》  
1965  
岐阜、長良川河畔にて  
転載元：「TATSUO KAWAGUCHI  
河口龍夫作品集」(株式会社博達堂、1992年)、46頁。



グループ〈位〉での先駆的な活動を通じて、表現したいものに見合う腕力を身につけて、芸術や表現の本質そのものを問うことを追求していきました。

一方、1967年(27歳)の京都アンデパンダン展の時から批評家を招いて講習会をすることになって、中原佑介さんがいらっしゃった。僕の作品<sup>2</sup>も取り上げられて批評していただいたんですよ。そのあと河原町を歩いていたら向こうから中原さんが来たから、僕は名乗り出て「もっと詳しく聞きたい」と言ったら、馴染みの店に連れて行ってくれてお酒を飲みながら話をしてもらえた。理論物理学を学んだ人だし、文学的な表現が一切なくて、今までの美術評論家とはまったく違うんですよ。その時から亡くなるまでお付き合いが続きました。

### 「関係」を創造するという芸術のあり方

1970年(30歳)のアンデパンダン展に出した《関係》は、展覧会の出品票と受け付け票と出品料の領収書と作品預証などの4つをコピーしたものを展示し、出品手続きの関係自体を作品にするというもの。何というか、京都アンデパンダンでしか発表できない仕事が《関係》だった。以降、「関係」というテーマが僕にとって非常に重要になって、可能性がひらけた。

60年代、70年代は芸術家のなかで、物質の力を借りずに観念で伝えようとする「コンセプチュアルアート」と、観念で侵さずに物質の存在をクリアに見せようとする「もの派」のような二極に分かれたんです。でも僕には観念も物質も分けられない、分けると時間が欠落してしまうから、どちらかを捨てるんじゃなくて、関係でつなぐことで関係そのものの創造を芸術表現にしていた。関係は見えないものだから無限にあるんですよ。関係を表現するというより、関係を実在させてそれ自体を作品にするという新しい関係の創造の意識化です。

同じ年のことですが、「人間と物質(between man and matter)」というテーマで美術展<sup>3</sup>に出品してくれと中原さんから頼まれました。その頃、僕は須磨に住んでいて海岸が散歩道だったんですが、陸と海がせめぎ合う波打ち際関係を明確にするのに間に何かを入れたらいいと思いついて、《陸と海》という写真作品を作りました。丸太から5メートルの4枚の板を切り出して、海岸線の勾配や潮の干満を調査して、陸と海のちょうど真ん中に板を置いたんですね。この展覧会は非常にユニークで、中原さんが選んだ作家の人数分の表現がそこにありました。彼の芸術家を見る目はやはりすごくて、全40名の出品者のほとんどがその後、世界で注目されるアーティストになっていったんです。

- 1 1957年3月に始まった京都市主催の自由出品、無賞、無審査の公募展。60年代前半、若手作家の発表の場として重視された。
- 2 《ふたつの円314mm 唯物論的空間又は空間の非空間化》河口龍夫、1967年。
- 3 「第10回日本国際美術展 1979 人間と物質〈東京ビエンナーレ〉」1970年。企画：中原佑介



